怪異の語り方

――『今昔物語集』巻二十七を中心に――

小島孝之

一　はじめに

院政期から中世にかけて、怪異との遭遇を語る説話は相当に広く流布したと思われる。怪異を語らずにいられないのは、時代が混沌と不安を蔵していたからに他ならない。人々の了解可能な世の秩序に綻びが生じ、何か得体の知れない不思議が引き起こされていると感じるとき、外部から何物かが侵入して怪異をもたらしているという説明が、人々の共感を得るのであろう。怪異譚の盛行と世の中の動向とは相互に響きあっている。いわば時代の共同幻想として怪異譚が流通するのである。『今昔物語集』巻二十七を中心にして多くの怪異譚が説話集に収録されているが、それは時代の空気を映しているのだろうと思われる。怪異が時代の共同幻想の産物であるなら

ば、その語りも共同の発想に支えられているに違いない。事実、怪異譚には強固な語り方の枠組みが存在するようである。ここでは、院政期を中心とする平安時代後期から中世にかけてのある時代に流通した一つの語りの発想の形を考えてみたい。こうした語りの枠組みの形は、一般的な用語ではしばしば話型という語で説明されるが、ここでは、もう少し細かいディテールも含めて考えたい。プロットという用語の方がふさわしいとも思うので、適宜用語を併用するが、呼び方は当面さしたる問題ではない。とりあえず語り方を観察しようとするのである。

さて、怪異譚にも幾つかの類型があり、そのすべてを俎上に載せる余裕はないので、ここで取り上げるのは、ひとまず、怪異との遭遇を語る話の一類型である。怪異との遭遇譚はさらに幾つかの類型に分かれ、鬼・妖怪の類と出会う話に限定する。鬼との遭遇譚の一つの典型的な形式に、百鬼夜行に遭遇するという類型があるが、これについては既に田中貴子氏の『百鬼夜行の見える都市』[1]に詳細に述べられているので、今ここでの検討の対象からは除いておく。怪異譚の形式と意味については、これも古く森正人氏に『今昔物語集の生成』の論があり[2]、基本的な問題点は森論文においてほぼ尽くされている。本稿も森論文の枠内を出るものではない。先行論文の延長上にあって、いささか微視的に語り方を観察しようとするのである。

二　典型・原型

まず、鬼退治説話の源流と言われる『今昔物語集』巻二十七「近江国安義橋鬼噉人語第十三」から見てみよう。本話について、新大系の脚注は「平家物語（屋代本等）・別巻「剣巻」、太平記・三十二、能「羅生門」（ただし前

半とのみ対応)、室町物語「羅生門」に、少しずつ形を変えて載る。本話は、これらの源流的位置にある」と注している。[3] この話型は森論文においてすでに分析の対象とされており、今さら取り上げるまでもないのではあるが、やはりこの話型の典型として見ておかないわけには行かない。森論文とは少し違った形でプロットを抽出してみよう。

鬼の噂

国司館での侍たちの雑談

安義橋に怪異がある噂話

武勇自慢の男、橋を渡ってみせると豪語

男、馬・鞍など充分用意して出発する

遭遇

夕暮れの安義橋の上に一人の女あり

男は、女を鬼に違いないと判断し急ぎ通り過ぎる

女、鬼の姿に変身して男を追う

馬・鞍の用意が功を奏し逃げ切る

脱出

対岸の人里

男、村里に駆け込む

鬼、いつか必ず逢うことを言い捨てて消える

帰還

国司館に帰る

男、褒美の馬を得て帰宅

後日

男の家に物怪あり

陰陽師、特定の日の物忌を勧める

物忌の当日、陸奥より弟帰り来て、母の死を伝える

弟を家に入れ、対面

男の死

弟、鬼に変身して男を殺す

鬼は掻き消し失せる

おおよそ右のようにそのストーリー展開をまとめることが出来よう。やや次元の異なる分類が混在するが、他の話と比較する都合上このようにしておく。

物語の発端が国司の館における侍たちの座談の場に始まるという語りの場の設定には、この後に取り上げる話にも共通する一群があり、すでに語りの場の問題として種々の議論があるが、この点については今は問わないことにする。怪異と遭遇する場である「橋」もまた、境界性を有する場という性質において共通項に括られる。この点はやはりすでに森論文に指摘がある。また夕暮れという遭遇の時間帯についても境界性を共通項としている。さらに、男が人里に逃げ込むと、鬼は追跡をやめてしまう。何故、人里までも追って来ないのだろうか。ここにもこの話型だけに留まらない怪異譚の共通項があるが、今はひとまず措いておく。

さて、これを源流的位置に想定する類話を、同様に分解してみよう。
まず、『平家物語』「剣巻」（屋代本）で見てみよう。

鬼の噂　京中の男女、突然行方知れずになる事件続発す（実は鬼の仕業）
　頼光の四天王の一人、渡辺綱一条大宮に使者として行く
　用心のため「髭切」の太刀を用意して出発する

遭遇　夜陰に一条戻り橋を渡る
　橋の東詰に二十歳ばかりの美女あり
　女は鬼の姿に変身して綱の髻を摑んで飛ぶ
　髭切の剣で鬼の腕を切り落とす

脱出　鬼は愛宕山へ飛んで行く
　綱は北野の廻廊の上に落ちる
　切った鬼の腕を持って頼光の館に帰る

帰還　播磨の晴明、七日の物忌を勧める
　綱、七日間の物忌に籠もる

後日　六日の夜、渡辺の養母が訪れ、死ぬ前に一度会いたいと言う
　養母を家に入れ、対面

養母、鬼の手を見たいと言う

鬼の奪還　養母、鬼に変身して腕を奪い返す

鬼は破風から脱出する

遭遇の場となった一条戻り橋は、安倍晴明が識神（式神）を橋の下に呪し置いたという伝承を持つ（『源平盛衰記』巻第十「中宮御産」[4]）など、異界との接点としての性格を濃厚に刻印されている所である。また、鬼が愛宕山を指して飛んで行くと語られる点は、愛宕山が天狗の棲みかとされる伝承とも交差している。鬼と天狗の置換可能性を示唆する話も存在する[5]。さらに、物忌当日に養母が現れるという語りも、鬼と母（養母）との相関という別の話型との共通項として注意される点である[6]。

次に、『太平記』巻三十二「直冬上洛ノ事　付鬼丸鬼切ノ事」の場合はどうであろうか。

鬼の噂　大和の国宇多郡の大なる森に妖物出て往来の人・牛馬を採り喰う

源頼光、郎等の渡辺綱に討伐を命じる

綱、秘蔵の太刀（鬼切）を帯し、甲冑を着て森陰で待つ

遭遇　朧月夜の曙、宇多の森を、綱は女装して通る

虚空より綱の髪を掴んで引き上げる者あり

秘蔵の剣で鬼の腕を切り落とす

脱出・帰還

頼光の館に帰還する

奪い取った鬼の腕を唐櫃に入れて置く

頼光悪夢にうなされ、陰陽師、七日の物忌と占う

後日

頼光、七日間の物忌に籠もる

七日目の夜、高安の里の老母が訪れる

母を家に入れ、対面

母、鬼の手を見たいと言う

鬼の死

母、鬼に変身して腕を奪い返す

頼光、件の剣で鬼の頭を切り落とす

鬼の胴体は破風から天に上る

本話は特に「剣巻」所収話との類似性が際立っている。ただし本話では、「宇多の森」が「橋」と置き換えられており、「森」が境界性を帯びた場として機能していることになるわけであるが、「剣巻」からの変奏であることはほぼ頷けよう。それにしても、以上のプロットの共通性から考えれば、言われる通り、この三つの話が相互に何らかの深い関わりを持っていることは明らかであろう。個別には変形、ズレを生じつつ、大筋に於いてかなり細部に至るまで原型を保っている。何が原型かということは簡単には断ぜられないが、この基本プロットの構

成をとりあえず、原型と看做しておこう。

さて、もう一つ、能の「羅生門」をも見ておこう。信光作とされ、「剣巻」や説話集を出典として創作されたと考えられるので、同型であるのは当然であるが、作劇上、意図的に改変されている部分も多く、型の中で細部がどのように変換されるのかを観察するには好都合でもある。

鬼の噂　　頼光の館での酒宴の座談
　　羅生門に鬼が住むという噂話
　　保昌と綱の論争。綱は、羅生門に行ってみせると豪語
　　綱は、甲冑に身を固め、重代の太刀を佩いて出発する

遭遇　　春雨降る暁、羅生門の石壇に上がり、しるしの札を立てる
　　鬼は綱の兜を後ろから摑む
　　綱と鬼の闘い。鬼の腕を斬り落とす
　　鬼は、いつか取り返すと予言して、虚空に逃げ上る

右のプロットを見ると、前半は『今昔』の安義橋の鬼の話に酷似し、後半は「剣巻」や『太平記』の話がよく似ている。『今昔物語集』は、当時ほとんど流布していなかったと考えられるから、直接的な典拠とは成り得な

い。したがって、「剣巻」や「羅生門」の創作に材料を提供した何物か、現存しない文献があったかとも思われる。それが、「安義橋の鬼」の話のような『今昔物語集』出典未詳話の典拠となった文献であったかもしれないが、分からない以上、今は措いておく。以上の同類話により、鬼と遭遇する場所が、安義橋の上・一条戻り橋の上・宇多の森・羅生門と変換され、森正人氏の指摘するように、橋・門などの境界の地であることが基本の条件である。時間的には、夕暮れ・夜陰・朧月夜の曙・春雨降る暁と、これもさまざま変換されるが、いずれも、一日を昼と夜に二分した内の夜に属し、薄明の時間帯であることが基本的条件である。「羅生門」の場合、他の先行話に対して、そうした置換可能なものの中から、都の中に凝縮した場と時間を設定することで、演劇的な密度の濃縮を意図しているように思われる。平安京の入り口である羅生門に場を設定することにより、その境界性は明瞭になる上に、王権の中枢である都城の内部に話を限定することで鬼出現の危機感をいやが上にも強調し、緊迫感をたかめていると思われる。かなり意図的な変換が行われていると見るべきなのであろう。また、「羅生門」が他の三書にある後日談の部分を一切持たないのは、これも演劇的必要による省略である。羅生門での綱と鬼との戦いが曲のクライマックスであり、ここで終ることによる余韻を重視しているに他なるまい。したがって、「羅生門」に後日談がなくとも、後日談を持つのが原型と看做すことに不都合はないと考える。

以上により、妖怪遭遇譚の原型が抽出されたものとして、以下、変形された類話について見て行こう。

三　類型

鬼以外の妖怪との遭遇譚を見よう。まず、『今昔物語集』巻二十七「頼光郎等平季武値産女語第四十二」である。

鬼の噂

源頼光の侍たちの雑談

渡という所に産女が出るという噂話

武勇自慢の平季武、その渡を渡ってみせると豪語

季武、武具を整えて出発する

遭遇

闇夜の川

季武は、向こう岸へ渡り、引き返す

川の中に女が現れ、泣く児を抱けと言う

季武、児を奪って館に帰る

帰還

頼光の館に帰還する

奪い取った児を見ると木の葉であった

産女は、狐だとの説と、子を産んで死んだ女の霊だとの説

この話では、妖怪と対決するのが前話に登場した渡辺綱と並んで源頼光の四天王の一人といわれる平季武である。後の御伽草子『酒呑童子』で大江山の鬼退治を行うのが頼光とその四天王であるように、彼らを鬼と対峙させる語りの流れがあった。そのことの意味も興味深い問題だが、今はこれも措いておく。

産女は鬼ほど恐ろしい物とは描かれていない。そのためか、妖怪に遭遇するところまでの話の進め方はほとんど原型通りであるが、赤子を抱かせるだけで危害を及ぼすようなことはない。帰還後の後日談の部分もない。奪ってきた児が木の葉であってみれば、妖怪が取り戻す必要のないものであり、季武と妖怪はそれぞれ相手から一本取った形でお互い様である。それが話のオチであり、したがって妖怪の仕返しに相当する後日談が語られないのは当然なのである。

この話では遭遇する場が「渡り」とされる。「渡り」は川の渡河地点を言うから「橋」と全く同じ機能を果たしている。一方、時間帯の方は「九月ノ下ツ暗ノ比ナレバ、ツ、暗ナルニ」と闇夜とされ、原型の薄明とは少し違いがある。これは後をつけた武士たちが、姿の見えない真の闇の中で声だけを聞いているという状況を作り出し、「児の《イガイガ》という泣き声」、「生臭キ香」という、聴覚と嗅覚で不気味さを際立たせ、追跡した三人の武士が、「頭毛太リテ怖シキ事無限シ」と感じ、さらに、「我ガ身乍モ半ハ死ヌル心地ス」と、恐怖を盛り上げようとしているからである。「我ガ身」とは、川の対岸にいる三人の武士の身であるとともに、語り手の身でもあり、それは読者の身でもある。こうした主体の転移による恐怖感の増幅という効果を狙った表現なのである。話の中身自体がそれほど恐ろしくないので、表現で恐ろしさを強めようとしているのであろう。語り手（作者）が、表現の細部にまで気を配って文章を練り上げていることが窺えよう。そうした意図的な改変を持ちながらも、

この話も比較的に原型がよく保たれていると言える。

次に、『今昔物語集』巻二十七「美濃国紀遠助値女霊遂死語第二十一」を見てみよう。

美濃国生津の御庄の紀の遠助、宿直はてて、美濃へ下る

瀬田の橋を渡る

遭遇

橋の上に女あり

女、遠助に小箱を託す

女の様子が気味悪く、断れない

女は、箱を開けるなと言う

遠助の従者には、女の姿見えず

帰還

遠助は依頼を忘れて箱を家に持ち帰る

遠助の妻、不審に思い、箱を開け、中に人の目があるを見る

遠助、慌てて箱を元通りに包み、橋へ行く

受取の女房に箱を渡す

脱出

女房は箱を開けたと言って怒る

遠助は箱を渡して家に帰る

後日　　遠助、気分悪くなり、臥せる

男の死　　遠助、数日後に死ぬ

箱の中にはくじり取った人の目がたくさん入っていた。この話のもつ怖さは、その無気味な箱の中身と、女が箱を開けた事実をなぜか察知していたという点にある。そのことによって、橋で出会った女が妖怪だったということを読者は推測するのであって、直接的な恐怖は描かれていない（遠助が死んだという事が恐ろしさを生んでいるが）。したがって、原型からはかなり隔たっており、一見異なる話型のようにも見えるが、プロットの構成を見ると、やはりこれも同じ話型と看做すことができよう。本話では、妖怪出現の噂といった事前の情報や妖怪との闘争といった華々しいプロットがなく、逆に「見るなの禁」が重要なプロットとして加わっている。他の類型との混態が見られるのである。しかし、妖怪女と遭遇する場所が「瀬田の橋の上」であり、受取の女と出会うのも「段の橋の上」である。いずれもが「橋の上」という境界である点、後日遠助が死んでしまう点に、原型の要素が見えている。類型の中の一変形と言えるようである。

次に、『今昔物語集』巻二十七「播磨国鬼来人家被射語第二十三」を見てみよう。本話も同様にプロットに分解すると次のようになろうか。

播磨国のある人が死ぬ

陰陽師、鬼が来るからと、物忌を勧める
家の者、厳重な物忌に籠もる
その時に至り、藍摺りの水干袴の男、門から中を覗く
男、いつの間にか家に入り込み、竈戸の前にいる
どうせ鬼に喰われるならと、鬼を雁矢で射る
矢、鬼に当るも跳ね返る
鬼、立ち走りて、掻き消すように姿を消す
その後、何事もなし

後日

鬼逃走

本話は一見すると異なる話型の話のように見える。しかし、右のプロット構成を見ると、原型の後半、後日談の部分が独立したものというふうに見える。この話では、何の前触れもなく鬼の訪れの予告が告げられる。何ゆえこの家に鬼が来ることになったのか、その説明がないために非常に唐突な感じさえする。そうした不自然さは、この話が原型の構成法の中から後半のみを取り出して、かなり機械的に適用して作られたところから来るのではなかろうか。本来は妖怪との遭遇が先立って描かれているべきなのであるが、そうした事件は本話にはない。妖怪との闘争が先行していないので、鬼の来訪の目的である仕返し、または奪われた物を取り返すというプロットが発動しないのである。

本話では、「今ハ何ニストモ、此ノ鬼ニ被噉ナムトス。同死ニヲ、後ニ人モ聞ケカシ、此ノ鬼射ム」という男

の覚悟を語ることに主眼があろう。どうせ死ぬなら、敵わぬまでも一太刀浴びせて自分の運を試してみようという、これも『今昔物語集』にしばしば描かれる特徴的な精神構造である。[7] この来訪した鬼に立ち向かうという話を語るのに、来訪した鬼を撃退する原型後半部の話型が利用されているのである。

四　変　型

さて、以上の原型及びその類型から見ると大きく変型していると思われる話を取り上げてみよう。

まず、『今昔物語集』巻二十七「従東国上人値鬼語第十四」を取り上げる。粗筋はこうである。

東国から上京した男が勢田の橋を渡ったところで日が暮れる。無人の大きな廃屋があったので、一行はそこに宿ることにし、従者は下の方に宿らせ、自分は上の方に泊まることにする。夜更けに、元からその部屋にあった鞍櫃の蓋が独りでに開くので、これは鬼に違いないと思い、咄嗟に馬に乗って逃げ出した。すると途端に櫃から出てきた物が、不気味な声を上げて追って来るのであった。勢田の橋にかかったが、逃げおおせられそうになく思えたので、橋柱の許に、観音を念じて隠れた。追って来た妖怪が橋の上から川に向かって叫ぶと、その声に応えて橋の下から出て来る物がいる。

本話は、ここで途切れてしまっている。いわゆる中断、後半欠話である。したがってこの後、どのように話が展開するのかは不明である。男が「観音助ケ給ヘ」と念じているので、おそらく危難を観音の助けによって免れるという、いわゆる観音利益譚になるのであろうと推測されるが、もしそうだとすると、むしろ観音利益譚を集

中的に収める巻十六にこそ相応しい説話であり、そのことに気づいた編者が収録を中断した理由であったかもしれない。説話の全体構成は不明とするしかないわけであるが、全体があるとしたら、それは、本論で扱っている話型とは大きく異なるものであろう。しかし、残った前半だけを見ると、幸いなことに、本論の妖怪遭遇譚の部分が残った形になっている。

一応プロットの形式にしてみると、次のようになろうか。

東国から上京した男、勢田橋のたもとの廃屋に宿る
夜更けに鞍櫃の中から妖怪出現
遭遇
男は勢田橋の下に逃げ込む
川の中から何物か妖怪の仲間が現れる

すなわち、ここには妖怪との遭遇の一点のみが記されるだけで中断してしまったのである。したがって、この部分のポイントは、勢田の橋である。先の第二十一話でも勢田（瀬田）の橋が遭遇場所となっていたが、ここは畿内から畿外への境界とも看做されるべき場所であり、さまざまに異界との接点として語られる場所でもあった。[8] ここで、姿は見えないが、鬼と遭遇するのは、やはり一連の原型からの変形と見てもよいのではなかろうか。橋の下から現れる妖怪の仲間らしき物とは、前述した一条戻り橋の下に隠し置かれた式神との共通性も窺われる。

さて、最後にもう一話、『今昔物語集』巻二十七「近衛舎人於常陸国山中詠歌死語第四十五」を取り上げてみよう。

ある近衛の舎人が相撲の使いとして東国に下る

遭遇　陸奥国と常陸国の境の焼山の関を越える

深い山の中で常陸歌を詠う

山の奥から恐ろしげな声で「あなおもしろ」という声がする

帰還　恐怖にかられてその山を過ぎる

使者は心地悪くなり、病気になったようである

男の死　使者、寝死に死ぬ

この話では、陸奥と常陸の国境の深い山が遭遇の場となっている。「山」は前述の「森」と同様に境界性を帯びた場となりうるが、本話では特に国境の関とされているので、その境界性は明瞭に指示されている。鬼や妖怪が姿を見せるわけではないが、一行の誰とも異なる「何物かの声」がそれに当たる。「恐シ気ナル音」とされることで、その声の不気味さが示されている。この何物かを、語り手は、「山神ノ此レヲ聞テ目出ル程ニ」、「其ノ国ノ神ノ聞キ目出テ」、「此レモ、山神ナドノ感ジテ留テケルニコソハ」と、重ねて推測を記す。国境の山神は古い民俗的な信仰対象の神であり、恐ろしい神でもあって、妖怪ではないが、極めて類似性を有するといって差し

支えない。この話も原型からの変型の一つと看做すことができるように思う。

話は大きく飛ぶが、ここで、柳田国男の『遠野物語』から一話を引用してみよう。

菊池弥之助と云ふ老人は若き頃駄賃を業とせり。笛の名人にて夜通し馬を追ひて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜に、あまたの仲間の者と共に浜へ越ゆる境木峠を行くとて、又笛を取出して吹きすさみつゝ、大谷地と云ふ所の上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺の林しげく、其下は葦など生じ湿りたる沢なり。此時谷の底より何者か高き声にて面白いぞーと呼はる者あり。一同悉く色を失ひ遁げ走りたりと云へり。（第九話）

遠野の土淵村から太平洋岸の釜石側の大槌町へ越える境界の峠が境木峠である。この境を越える時に、笛の音に対して谷底から「面白いぞー」という声が聞こえたという。これはまさに、『今昔物語集』巻二十七の四十五と全く同型の話である。もちろん近代（おそらく明治初期）の東北の一寒村の噂話と平安時代の都での伝承に何のつながりもある訳はない。

駄賃と呼ばれた荷物運搬を業とする人々が、深い山を越えて他郷他村へ往来する折に経験した恐怖心が生んだ話に違いないが、同業者の等しく抱く思いを基盤にして、こうした話がいわば共同の幻想となっていったのであろう。そうした機制はおそらく時代に拘らない。きっかけさえあれば、いつでもこの幻想は活性化され、蘇るのである。すなわち、人々の心の深層に共同の幻想の形が沈み籠められており、何らかのきっかけでこれが活性化

されると、具体的な形を取り、話として浮上してくる。話はその場の状況に応じてさまざまに変奏されて出現するということではなかろうか。

本論で扱った妖怪遭遇譚もそのようにして人々の深層に沈殿している型の一つなのである。院政期から中世にかけて、人々が異界の何物かが侵入してくると感じた時、それを語る仕方として深層から汲み上げてきた型に乗せて語ったのである。その最も共通的に括れる語り方を原型と呼んでおけばよいのであろう。

注

(1) 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』(新曜社／ちくま学芸文庫)。

(2) 森正人『今昔物語集の生成』(和泉書院、一九八六年)。

(3) 新日本古典文学大系『今昔物語集』の当該巻は森正人氏担当。

(4) この記事は、『源平盛衰記』の国民文庫版で小字の注記とされているところにあるので、成立は物語本体よりも遅れる可能性がある。中世末期の伝承の可能性があろう。

(5) 直接的に鬼と天狗が入れ替わる例は見出していないが、例えば『天狗草紙』に天狗となった後鳥羽院が登場し天下を乱す評定に加わっている。一方、『平戸記』に引用される高野山の智行上人の夢想に登場する後鳥羽院は、怨霊となって疫病や飢饉をもたらすという。他方、疫病や飢饉は鬼が持ち込むとする話は多く存在する。疫病・飢饉を中に置いて鬼と天狗が置換可能であることを示唆していよう。

(6) 浅見和彦『説話と伝承の中世圏』(若草書房、一九九七年)Ⅳ3「「鬼の母」と「母の鬼」」に触れるところがあ

る。

(7) 池上洵一『今昔物語集の世界―中世のあけぼの―』(以文社、一九八三年)が詳細に論じている。小峯和明『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院、一九八五年)II第二章ii「「今ハ限リ」と生命観」にも関連する論述がある。

(8) 御伽草子の『俵藤太』では、瀬田の橋に横たわる大蛇の背を踏むところから、ムカデ退治、竜宮での歓待と展開する。瀬田の橋と異界との接点を示唆する。

<付記> 本稿は、今から十余年前に講義で話したメモをもとにざっと原稿化したものの意に満たなかったので、そのままにしておいたものである。本来、この号には別の論文を書く予定であったが、年末より激しい腰痛に悩まされており、資料調査が思うにまかせず、完全な新稿を用意することが出来なかった。やむを得ず、旧稿を引っ張り出して、注などをいささか書き直したもので責を塞がせていただいた。ご寛恕を乞う。